

【関係図で以下内容を知る】・・・「シェイクスピア・セルバンテス・フローベール・チャーホフ、そして恒存」、彼等に共通するもの、それは「個人主義否定」と言ふ事である。彼等の精神には、その神に叛逆せる時代(ルネサンス・近現代)にありながら、なほ「B(精神)⇒理想人間像(C)」を護持せんとする確信と意慾があるのが窺へる。とはつまり、個人的自我(B)は、個人の純粹性(B)としての静謐を保ち、「絶対・全體(C)」にそれを繋いだ、と言ふ事なのである。

D1(関係:實在物)・・・D1(神意)

①D1騎士道・愛(セルバンテス)②「シェイクスピア悲劇主人公」の宿命D1喪失＝ルネサンスの危機D1 ③D1神意・愛(フローベール)④D1「在るがまま」(チャーホフ)⑤D1「関係がすべて」(恒存)

C(神・歴史＝時間的全體・自然＝空間的全體)・C

‘(場)・・・①理想人間像C(セルバンテス)②C(カトリシズム(シェイクスピア)③理想人間像C(フローベール)④C喪失⇒C的無執着(チャーホフ)⑤C絶対・全體(恒存)。

F(言葉:潜在物)・・・

①Fせりふ:「鉄の時代(ルネサンスの個人主義)に、黄金時代(騎士道＝理想人間C)を」(セルバンテス)。
②自由F＝孤独F＝自我の不安F(シェイクスピア悲劇主人公)。
③F:「マダム・ボヴァリーはわたしだ」と言つたのは、「自分の夢をそんな形でしか提出しえなかつたからだ」(フローベールの言葉)。
④F:獨り合點(自己解釋D1)的諸概念＝せりふF(チャーホフ劇)。
⑤F:「心の動き(関係D1)を形のある『物』として見せるのがせりふFの力學」(恒存)。

E型(潜在物Fの裏に實在物D1を際立たせる型・Fの「so called」でD1を見せる)・・・①リアリズム(A:常識・サンチョ)がロマネスク(B:ドンキホーテ)を批評(Eの至大化)する事。とはつまり、「肯定的＝積極的な生命慾A」と「合理を基調とする人間の理性(實證精神: A' ⇒ A)で描いた小説(セルバンテス)。
②Eの至大化＝D1の至大化「危機(D1)と戯れる」(シェイクスピア)。
③E型「理想人間像(C)があつたればこそ實證精神(A' ⇒ A)をしてあれほどまでに自我(代理「A」)としてのボヴァリー夫人を斬りさいなむ(Eの至大化)ことを許したのである」(フローベール)。
④在るがままに「獨り合點」を描く「Eの至大化」(チャーホフ)。
⑤「形のある『物』として見せる(Eの至大化・so called)のがせりふFの力學」(恒存)。

